

道徳科授業の理論的基盤を構築する研究

—廣池千九郎の『道徳科学の論文』と道徳科の内容項目を関連づけて—

A Study for Constructing Theoretical Foundation of Moral Lesson

— Relating to “Thesis of Moral Science” of Chikuro Hiroike and Moral Content Items—

柳沼 良太

YAGINUMA Ryota

[キーワード Keyword]	道徳授業, 道徳科学, 廣池千九郎, 問題解決学習 Moral Lesson, Moral Science, Chikuro Hiroike, Problem-solving Learning
[所属 Institution]	岐阜大学大学院教育学研究科 (Graduate School of Education, Gifu University)

[要 旨] 道徳科授業の理論的基盤を形成するために、廣池千九郎の道徳科学を道徳科の内容項目を関連づけて検討する。内容項目Aでは、「自己の生き方」を反省し、その改善・充実を図ることを検討する。廣池の道徳科学の見地から、「無我の心」「誠の心」「自己犠牲の心」「やりとげる心」の指導法を取り上げ考察する。Bでは、対人関係を振り返り、人間関係の問題に関わる解決や調整を検討する。特に道徳科学の見地から最高道徳と称される「慈愛」と「正義」の指導法を取り上げ、その行動を促す「勇気」について吟味する。Cでは、人間が相互に支え合って生きていることを認識し、その恩恵に報いて集団や社会に貢献することを検討する。道徳科学の見地から「義務の先行」「伝統の尊重」「三方よし」の指導法を取り上げて考察する。Dでは、人知を超えた尊い存在と向き合うかについて検討する。道徳科学の見地から、「自然からの恩恵に感謝する心」「崇高なものへの感謝・報恩」「天命に従うことを通した究極の品性向上」を取り上げ、総合的な人心開発の方法について追究する。

はじめに

道徳教育の学問的基盤を再構築するために、筆者は先に我が国の道徳教育を廣池千九郎の『道徳科学の論文』と関連づけ、科学的根拠に基づく道徳教育の在り方について検討した⁽¹⁾。そこでは、廣池が示す「道徳教育の学問的基盤」を基にして、「道徳を学ぶべき根拠」「道徳の指導内容」「道徳実行の効果」「道徳を学ぶ意義」「教師の道徳的な生き方や心構え」「道徳的問題を解決する原理・原則」などについて具体的な教育方針を明らかにした。こうした道徳教育の理論的基盤や道徳的問題解決の原理・原則をふまえた上で、今度は実際の道徳授業において問題解決学習をどのように展開するかが課題になる。特に、実際の道徳授業に活用するためには、道徳科の内容項目に対応させて具体的な学習指導過程を検討する必要がある。そこで、本稿では道徳科の内容項目(A、B、C、D)に応じて問題解決的な学習の学習指導過程をどのように展開すればよいかについて検討することにしたい。

ただし、上述した廣池は、今日の学習指導要領のように道徳的諸価値をそれぞれ単独で教えることを勧めているわけではない。むしろ、廣池は「慈悲」や「正義」を中心とした「最高道徳」を重視した上で、様々な道徳的諸価値を統合して教育することを提唱している。そこで本稿では便宜的に廣池の道徳科学的発想を学習指導要領の道徳科における内容項目と関連づけて考察することにする。

本稿の内容構成としては、1節において道徳科の内容項目A「主として自分自身との関わり」を取り上げ、道徳は何のために学ぶかを中心に考える。2節では、内容項目Bの「主として他の人との関わり」を取り上げ、特に対人関係を軸に、いかに思いやり(慈悲の心)を示すかについて考える。3節では、内容項目Cの「主として集団や社会との関わり」を取り上げ、集団や社会において「三方よし」の考えをいかに実現するかを考える。4節では、内容項目Dの「主として生命や自然、崇高なものとの関わり」を取り上げ、自己がいかに自然や宇宙と繋がるかを検討する。

以上から、実際の道徳授業において道徳科学と学習指導要領の内容項目を対応させて、問題解決学習をどのような学習指導過程として構成すべきかについて検討していきたい。

1節 内容項目Aの「自分自身との関わり」に関すること

—自己の生き方に関わる問題をどう解決するか—

内容項目Aの「主として自分自身との関わり」の中で重要なのは、「自己の生き方」をふり返って反省し、その改善や充実を図ることである。廣池は、自らの生き方について「自己反省」し、「利己心から脱却」し、無我の心、誠の心、自己犠牲の心、やりとげる心を養い、日々精進するよう説いている。この点について廣池は「一生涯学ぶことを止めず、品性の完成に向けて精進し続けてこそ、心豊かな人生を全うすることができる」と述べている(廣池、2014年、117頁)。こうした精神状態になると、自らの「人心開発」をすることができると共に、精神衛生状態も改善され、ストレス・フリーな生活になることも指摘している。以下では、「無我の心」「誠の心」「自己犠牲の心」「やりとげる心」「精神衛生」を取り上げて、その指導法を検討したい。

(1) 無我の心を育てる

道徳教育の基本は、子どもが生来の自己中心性や我欲から離れて、自分で自分を制御できるようになることである。廣池によれば、自分だけの利益や幸福を追い求める利己心を克服し、自我(我欲)にとらわれなない精神的態度を養うことが大事になる(第9巻3321頁)。そのためには、「利己心」から離れ、「無我の心」で多面的・多角的に考えられるようになることである。そこに利己心が少しでも入ってくれば、自分の有利なように偏った見方・考え方をするようになり、公正・公平な見方ができなくなる。そこで、「無我の心」に徹して、自分と相手を含めた世界全体を総合的に俯瞰できるようにするのである(第9巻3321頁)。

ただし、我々が生身の人間である以上、自らの利己心を完全に脱却することは、難しいことである。人間は生来、自分の欲求や過去の経験と関連づけて物事を見たり考えたりして、自分に少しでも有利になるよう考え判断し行動するものである。そこで、なぜ自分の中心にある利己心を断ち切る必要があるかを見ておこう。廣池によれば、利己心に基づく思考習慣を断ち切る目的は、もともと人間が道徳的過失や道徳的罪をもつからである。人間は道徳的過失や道徳的罪があるため、本来のあるべき姿から離れてしまい、本来の資質・能力を発揮できなくなってしまうと考える。

普通に考えれば、人間が利己心をもつことは自然なことのように思われるが、それをもつことによって道徳的な過失を積み重ね、道徳的な罪を重くしていく。そうした道徳的過失や罪につながる思考や判断や行為を繰り返していくと、それが生活習慣となり、さらにそうした利己的な人格を形づくることになる。こうなると、自分では頭ではよくないと分かっている、自動で思考が判断や行為に結び付いてしまい、自分で自己の生き方を改善できなくなってしまう。この点について仏教でいえば、人間の思考や習慣が宿業(カルマ)を生み出し、それが本人を苦しめ続けることになる。そうした負の思考習慣から脱却することが、人間本来の資質・能力を生かすことになり、本当の幸福や成功に繋がることになるのである。そのための第一歩として、まず自らに道徳的過失や道徳的罪があることを素直に認め、そうした「過失を償おうとする心」、「罪を贖おうとする心」をもち、そこから「解脱しようとする心」こそが大事になるのである(第9巻3314頁)。

(2) 誠の心を育てる

上述した利己心から脱却した心が、人間本来の心であり、嘘や偽りのない美しい心であり、一言でいえば、「真心」あるいは「誠の心」ということになる。ここでいう「誠の心」とは、相手を思いやる誠意ある心である。その意味で、あらゆる場面において誠を尽くして対応することが大事になる。何ら見返りや報酬を求めることなく、真白な心をもって世のため人のために尽くす。こうした誠の心で行動することによって、私たちが知らない間に犯してきた過去の道徳的な過失や罪を償うことができるようになる。そうすることで、自分自身の人格が磨かれていき、より充実した人間に近づくことができるようになる。

こうした誠の心こそが、人間本来の姿であるため、道徳的な諸問題を解決するための道徳的行為を行う方法も、誠を尽くした在り方を考えることが大事になる。時代や時期、場所、場合、相手の立場や事情など問題状況を十分に配慮した上で、やさしく謙虚な誠の心で解決策を考えるようにする。

(3) 自己犠牲の心を育てる

「自己の生き方」としては、上述したように利己心から脱却し、人に誠意をもって対応するだけでなく、さらにより積極的に自己犠牲の精神で考え、判断し、行動できるようになることが大事になる。ここでは何か善い行いをして、それは自己犠牲の精神で行うのであり、相手からお礼を期待するものではない。廣池によれば、「道徳的行為とは、本来自分を犠牲して行うものであり、見返りを目的とするものではないから」（第9巻3314頁）である。こうした道徳的行為は、「こちらからの一方通行で構わない」という気持ちで行うのである。こうした「自己犠牲の精神」が、実は自分自身を成長させる究極の考えである。

こうした自己犠牲の心は、一見すると他者や社会のために行うため、他者や社会に利益を与え、その分だけ自分には不利益になると考えられるかもしれない。そのため、道徳的行為をすると、自分が損をすると考えられることもある。しかし、こうした自己犠牲的な精神にもとづく道徳的行為は、決して人のためだけになるのではなく、自分の品性や道徳性を高めることになり、その結果として自分の幸福にも繋がる。それゆえ、自己犠牲の行為は、巡りめぐって自分のため（真の利益）になる（廣池、2014年、36頁）。それゆえ、「世のため、人のため」を考えて自己犠牲的に行うことが大事になり、自分のことを優先するのではなく、他者や社会を救済することが優先になるのである。

また、上述した「無我の心」で指摘したように、人は誰でもこれまでに多くの道徳的過失を犯しており、また多くの人々から世話になって生きている。そうした道徳的過失への埋め合わせや報恩への感謝をしようとする気持ちになれば、目の前の相手から何か返礼を期待する必要などないことになる。このように道徳的行為は、過失の埋め合わせをし、過去に受けた多くの恩に感謝することを動機とするため、あくまで自己犠牲的に行うことが先行すべきなのである。

(4) やりとげる心を育てる

次に、Aの「自分自身に関すること」で大事になるのは、「途中で努力を止めないこと」である。学問でも芸術でもスポーツでも、人が何かに成功するためには、上述したように誠実な態度（誠の心）で努力を継続することが必要不可欠になる。そうした貴重な努力の積み重ねを途中で止めることなく、一步ずつ着実にいき、やり遂げたからこそ、成功したと言える。これは道徳教育における品性の完成も同じである。初めのうちは、誰でも目標を立てて品性を高めようと努力するものだが、最後まで努力を続けることは想像以上に難しい。廣池によれば、「一生涯学ぶことを止めず、品性の完成に向けて精進し続けてこそ、心豊かな人生を全うすることができる」（廣池、2014年、117頁）。

ここで品性を高めること自体に喜びを感じることができれば、やりとげる心を育てることもできるようになる。品性を高めることで自分がどのような人物になり、その時周りの人たちはどのように反応し、その結果として自分はどのような気持ちになるかを考え、快い感覚を想像できるようにすることがポイントである。こうした「やりとげる精神」を尊重するのは、昨今アメリカで注目されているGRIT（やりとげる力）の発想にも共通する考え方である⁽³⁾。

(5) 精神衛生をよくする

人間が「自分自身に関すること」でよりよく生きるためには、精神衛生の状態をよくすることも重要である。道徳的な生き方は、自分だけでなく相手や社会にも気づかい、自分は正しい道を歩んでいるという安心感があるため、心が前向きで晴れ晴れとするため、「精神的なストレス」が軽減していく。廣池も、こうした精神的なストレスがなくなっていくことで、そこから影響を受ける「肉体の疲弊」も防げるようになる効用を指摘している（廣池、2014年、203頁）。こうした道徳的な精神がストレス・フリーの状態になるという考えは、今日流行しているマインドフルネスの考え方にも共通すると言える。また、こうした精神衛生をよくすることが、人生の困難な諸問題に出くわしても「折れない心（レジリエンス）」をもつことに繋がる。

人間はさまざまな精神上の悪習慣をもつことがある。例えば、怠ける、嘘をつく、人をだます、悪口を言うなど。こうした悪習慣を改善することは、急激に行おうとしても無理が生じるため、ゆるやかに進め、精

神的なストレスを発生させないようにすることが大事である。そうすることで、それほど苦痛を伴わないで良い習慣を実現できるようになるのである。

さらに、廣池は道徳的な生き方が精神衛生状態をよくするばかりではなく、結果的に長寿にも繋がることも指摘している。不誠実に生きて他者と対立ばかりしていると、当然ながらストレスがたまって精神衛生状態を悪化させるが、逆に誠実に生きて人間関係を良好にしていくと、精神衛生がすこぶるよくなる。そうした道徳的な生き方が精神衛生をよくして健康・長寿に繋がることは、最近のポジティブ心理学や幸福学などでも実証されてきている。

2節 Bの「他の人との関わり」

—対人関係にかかわる問題をどう解決するか—

内容項目Bの「主として他の人との関わり」で重要になるのは、対人関係をよりよく改善・維持することである。それは身近な他の人々との道徳的問題に関わる解決や調整である。こうした問題解決を取り扱う際に学習指導要領で重視している道徳的諸価値としては、「親切、思いやり」「感謝」「礼儀」「友情、信頼」「相互理解、寛容」などがある。廣池はこうした人間関係の問題を扱う際に重視すべき道徳的諸価値として、特に「慈愛の心」と「正義の心」を取り上げ、その道徳的行動を促す「勇気」にも注目している。以下では、この三つの道徳的諸価値を中心に検討したい。

(1) 慈悲の心を育てる

廣池が道徳的諸価値の中でも最も重視するのは、「慈悲の心」であり、「最高道徳」の中でも最も高い位置に置いている(9巻8章3250頁)。この「慈悲の心」は、論語でいう「仁恕の心」、仏教でいう「慈悲」、キリスト教でいう「隣人愛」と関連した道徳的価値であり、また社会一般で言われる「真心」にも近い概念でもある。この「慈悲の心」を学習指導要領の内容項目に示された道徳的諸価値に対応させると、「親切・思いやり」と近いと思われる。しかし、廣池の言う「慈悲の心」は、普通道徳でいうところの「思いやり」や「親切」よりも深い意味概念を有しており、「相互理解」「寛容」の意味合いも含まれてくる。こうした「慈悲の心」は、「常に他人の立場を思いやる慈しみの心」と考えられる。こうした慈悲の心を養っていくと、自分だけを優先しようという「利己心」は徐々に消え失せ、周りの人たちに配慮できるようになり、その分だけ道徳性が高まることになる。

例えば、遠出した後に電車でやっと席に座れたとする。その目の前に高齢者がやってきた時、どうするか。①自分は疲れているのだから、席を譲らない。②寝たふりして席を譲らない。③無言のまま席を立ち、去っていく。④「よろしければどうぞ」と言って、席を譲る。こうした様々な解決策が考えられる中で、「どれが慈悲をもって行動をしたことになるか」を問いかける。自分の過去や現在を振り返ると、いろいろな解決策があることに気づく。「自分がこれからなりたい姿はどのようなものか」も考える。自分を優先する人になりたいのか、嘘をついて寝たふりをする自分になりたいのか、自分も疲れているがあえて席を譲る人になりたいのかをよく考えるのである。

こうした「慈愛の心」をもって問題解決する際に大事なものは、何らかの道徳的問題を抱えた人に対して、「柔らかい対処」を心がけることである(廣池、2014年、170頁)。仮に相手が明らかに間違っている場合でも、それで相手を一方的に責め立てれば、相手は反発して対立や喧嘩に発展していくことになりかねない。それよりも、相手がかりに過ちを犯したとしても、その相手の立場や気持ちをも共感的に理解して、相手が自己反省できるように促すことが肝心になる。例えば、掃除をさぼっている生徒がいたとする。そこに、班長がやってきて、「何をやっているんだ。真面目にやれ」と相手を責めるだけでは、相手もますますやる気を失うか、逆に反発することもあるだろう。掃除の目的や意義を説いて、模範を示すと共に一緒に取り組もうと励ますことができれば、相手も先ほどとは違った前向きで協力的な態度になるだろう。道徳的な主張をする際にも、「柔らかい対処」で接することが大事なゆえんである。

(2) 正義の心を育てる

他の人との関わりにおいて道徳的な問題が生じた場合は、正義（公正・公平）に焦点を当てて考えることが一般的である。意見が対立する場合は、どちらの意見がより正義に適っているか、より公正・公平かを考えることになる。ただ、対人関係の道徳的問題では関係者間にそれぞれ言い分があって、調整が難しい場合もある。また、自分の正義と相手の正義とが真っ向から衝突したり、正義を優先する心と思いやりを優先する心とが対立したりすることもあるだろう。例えば、正義と思いやりが対立する問題状況をどう解決するか。具体的には、友達が不正行為をしていた場合、どう対処すべきか。大事なものは、正義の考えを尊重しながらも、「思いやりの心を込めて行動する」ことである(2014年、86頁)。先の事例でいえば、不正な行為は止めるべきであるが、相手が納得できるように思いやりの心を込めて説得すべきである。

ただし、以上は相手が善良な人であることを前提としており、もし相手が確信犯的に悪事を為す人であれば、上述した「慈悲の心」で問題解決ができなくなる場合もあるため、法（リーガル・マインド）の見地から再検討してみることも有意義になる。

(3) 勇気ある行動力を育てる

他の人との関わりで望ましい行動や最善策を考えることそれ自体は、それほど難しいことではない。例えば、いじめられている人がいれば、加害者をいさめて被害者を助けあげるとか、先生に報告してあげればよいことになる。しかし、実際にそう行動できないのは、その結果として起こり得る不利益（加害者からの攻撃、今度は自分がいじめられる恐怖など）があるからである。ここで大事になるのは、何が単純に正しいかではなく、正しいことや良いことを「勇気」をもって行動できるかどうかである。廣池の言葉を借りれば、道徳を行うためには、「勇気を振り絞る」ことが必要なのである(第9巻3246頁)。実際に道徳的行動ができるようになるためには、この「勇気ある行動力」が必要不可欠になる。

道徳授業の中でただ口先だけで立派なことを考え発表すれば、それで子どもの道徳性が高まるわけではない。口先できれい事を言うだけなら、誰でもできるが、実際に行動しないのであれば、不誠実（不道徳）であることになる。廣池が重視する「身口意一致」と関連づけて言えば、道徳的な問題場面に応じて適切な道徳的行為を考え判断し、それを実践しようとする意欲や態度をもつことが大事になる。子どもが道徳的な思考をするだけでなく、勇気をもって道徳的に行為できるように指導することが、道徳教育の役割である。

(4) 「三方よし」の発想を育てる

他の人との関わりでも三者以上になった場合は、そこに関係する全員が幸福になれる「三方よし」の考え方が大事になる(8巻2856頁)。上述したように、自分や身近な友達（他の人）だけを重視するのではなく、第三者にも配慮するということである。廣池はこうしたテーマでタクシーの乗り合わせの問題を取り上げている⁽⁴⁾。例えば、例えば、電車の事故があり、タクシー乗り場で大行列に入り、順番を待つとする。このような場合、どうするか。ひたすら順番を待って、自分の番が来たら一人で乗って行くこともできるが、行き先が同じ方面の人たちがいないか声をかけ合うこともできる。緊急の場面であるため、同じ方面の人たち同士で相乗りする。廣池にも同様のエピソードがある。その場合、「正規の料金を人数で割って、いくらか多めにタクシー料金を払う」という解決策を実行している。この場合、相乗りの客同士も、運転手も嬉しいため、「三方よし」ということになる。

3節 Cの「集団や社会との関わり」について

—集団や社会に関わる問題といかに向き合うか—

道徳科の内容項目Cに対応する「主として集団や社会との関わり」で重要になるのは、我々人間が支え合って生きていることを認識できるようにすることである。つまり、社会生活における相互依存や相互扶助の関係をしっかり認識できるようにすることである。そうすることで、自分が他者や社会から多くの支援や恩恵を受けて生きていること、そして過去から多大な遺産を受けていることに気づき、おのずから感謝して受

けとめることができるようになる。それと共に、その恩恵に報いて、自分も周りの集団や社会に貢献しているように思えるようになることである。

学習指導要領の内容項目に関連した道徳的諸価値としては、「規則の尊重」「遵法精神」「公正、公平、社会正義」「勤労・公共の精神」「家族愛、家庭生活の充実」「よりよい学校生活、集団生活の充実」「伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度」「国際理解、国際親善」などが掲げられている。廣池はこうした集団や社会に関わる内容項目と関連して、(1)「義務の先行」、(2)「伝統の尊重」、(3)社会的「三方よし」、(4)複数の道徳的諸価値の対立、(5)「道経一致」について言及している。以下でそれぞれのテーマを検討してみよう。

(1) 義務を先行する心を育てる

社会において人間には権利と義務がある。個々人が自分の権利だけを主張して、社会的な義務を果たさなくなれば、社会は成り立たなくなる。一般的には、自分の有利になる権利を求めることは多くても、面倒な義務は後回しにしがちである。そうした問題状況を見据えて、廣池は「義務の先行」を徹底することが必要であると説いている(7巻2173頁)。廣池によれば、義務を先行させる理由は、誰もがもつ「道徳的な負債」を少しでも返済しようと努めることで、歴史的・社会的な責務に目覚め、自ら率先してその務めを果たそうとするからである。ここから、単に自分の権利を主張するだけでなく、まずは「義務の先行」を重視すべきであると考えられるようになる。こうした義務を先行させようとする意欲と努力が、結果的に自分自身の品性を高めると共に、家族の幸福を増進し、社会全体の改善にも繋がることを実感することができるようになる。

(2) 伝統を尊重する心を育てる

グローバル化や情報化によって社会が大きく変動し、価値観もますます多様化しているが、その一方で我々の社会が多くの伝統や文化に支えられて今日に至っていることも事実である。今の時代だけで社会が完結しているわけではなく、過去から積み重ねられてきた伝統や文化から多くの恩恵を受けて今の社会がある。新しい時代を切り拓こうとする時には、ともすればそれまでの伝統や文化を蔑ろにしたり棄却したりしてしまうことがあるが、こうした伝統や文化こそが実は変革の礎となっていることを自覚する必要がある。

廣池もこうした伝統(Ortholion)を最大限に尊重している(7巻2302頁)。特に、世界の諸聖人(例えば、釈迦、孔子、ソクラテス、キリスト)の言葉こそ尊重すべき伝統とであると強調している(7巻2313頁)。物事の判断基準として、諸聖人の教訓に適うように考え議論することになる。もちろん、その場合でも、道徳科学の見地から、諸聖人の言葉をただ頭で理解するだけでなく、その言葉をもとに行動してみて、その結果どのような効果をもたらされるかまで見据えて、その言葉の真義を理解できるようにすることが大事になる。こうして言行一致の道徳性が養われる。

(3) 社会的「三方よし」で発想する心を育てる

集団や社会において起きた問題を考える際に大事になるのは、何が正しいかを判断すると共に、それに関連する利害関係者にそれぞれ配慮し、互いの意見を調整することである。ここでも、廣池は、自分、相手、第三者(集団や社会を構成する人々)を生かす「三方よし」の発想を生かしている(8巻2857-2858頁)。

廣池によれば、自分の意見をただ主張するだけでなく、相手の立場を思いやる慈しみの心をもって対応していくと、「周囲との衝突や争いもなくなって、自分にも社会にも幸福がもたらされることになる」。こうした「三方よし」の考え方は、自分の見方・相手の見方・世間の見方を総合するため、かなり難しい問題解決を強いられることになる。

ここでも単に他者との利害関係で争うのではなく、他者や社会の人々から受けた恩恵に報いようとする心が大事になる。例えば、廣池は混雑している公共の乗り物の中で席を無理に確保した事例を取り上げている(2014年、176頁)。もし自分のいるところから少し遠くの席が空いたらどうするか。主人公は、急いで席を取りに行き、自分が座るだけでなく、家族や仲間が座る席をも多少無理してでも(割り込んででも)確保し

たとする。これは道徳的な行為だろうかを考え議論する。たしかに主人公の家族や仲間を大切にしようとした動機にもとづく行為と考えれば、道徳的であるかもしれない。しかし、急に割り込まれてしまい、座れなかった人たちから見れば、不道徳な行為になってしまうだろう。公共の場においては、自分や相手だけを優先して利益を得ようとするのではなく、第三者の利益にも十分配慮した上で道徳的な行為を考える必要がある。

廣池は、現実的な労働問題も同様の道徳科学の見地から考えている(廣池、2014年、237頁)。一般に、経営者は従業員の給与を少しでも安くしたいと考えるし、従業員は少しでも高い給与を得たいと考える。会社は商品を高く売って儲けを出したいと考えるが、世間ではより安く買って得をしたいと考えるものである。こうした場合に、経営者も従業員も世間も「三方よし」とするためにはどうすればよいかを考えればよいことになる。経営者は従業員を家族のように親しみをもって接し、世間によりよい商品やサービスを提供できるように努める。また、従業員も少しでも会社に貢献し、よりよい商品やサービスを提供するよう顧客と接する。そして世間はその会社を尊重し、その商品を必要に応じて購入する。こうした「道経一致」の思想は、廣池の道徳科学の発想と合致する。道徳と経済は決して矛盾・対立するものではなく、相互補完的な関係になり得るものなのである。

(4) 複数の道徳的諸価値の対立

集団や社会に関わる道徳的問題で解決が難しくなるのは、「正義」の考えと「正義」の考えのように同一の道徳的価値が対立した場合や、「正義」の考えと「慈悲」の考えのように異なる道徳的諸価値が対立した場合である。例えば、小学校で昼休みの校庭の使い方が問題になったとする。6年生グループと5年生のグループで対立が生じたとする。それぞれ自分たちの要望(利害)にもとづく主張を言い合うだけでは対立が深まるだけで、なかなか解決には至らない。そこで、二つの案を折衷する案を考えられないか検討することが大事になる。校庭を二分割するとか、曜日ごとに順番で使うなどの考え提案したりしながら現実的に解決していくことができるだろう。

また、「公平」と「円満」が対立した場合、どうするか。「真理」と「人格」が対立した場合、どうバランスをとるかが問題になる。正しいことを優先すべきなのか、それとも相手の人格を尊重することが大事なのかである。こうした場合は、公平を貫きつつ、円満を保つことである(9巻3270頁)。こうした道徳的な問題は、幼稚園をはじめ、小学校の低学年から中学校に至るまで多くことがあるため、早い段階からこうした問題解決を子ども自身が主体的に考え判断できるように指導することが重要になる。

さらに、より広い見地で全体を俯瞰すると、社会や歴史に関わる諸問題もある(廣池、2014年、158頁)。社会や歴史を創り出した偉人・先人の話を参考にしつつ、どうすればより良い社会を協働して築いていけるかを考えていくことは有意義である。「人心の開発」だけでなく、「社会の発展」に寄与するために、どう解決するかを検討することになる(2014年、182頁)。このように視野を社会や歴史に広げ、より良い社会を築くために貢献しようとする、自分のことばかり優先する自己を超えて、より大きな自己に成長させることができる。

(5) 道経一致の精神を育てる

以上のように道徳と社会の関係を考えることは、道徳と経済を考えることにも繋がる。一般に、損得や収支を重視する経済は道徳とはあまり縁のないものと思われがちである。しかし、廣池は人間が生きていく上で大切な現実の経済活動こそ道徳が重視されるべきである⁽⁵⁾。精神活動と経済活動が深く関連し合っており、道徳的な精神活動が結果的に経済的な繁栄をもたらすのである。

経済の見地からみると、単に自分の利益を追求するばかりでは大きな成果を得ることはできない。自分だけでなく取引をする相手や、世間一般の利益を考えることが大きな繁栄につながる。廣池は本格的に道徳教育に着手する以前から、(3)で述べたように労働問題を道徳的に解決することにも尽力している。道徳科学の発想が単なる学校教育の世界だけでなく、社会や労働の問題にも広く活用できる証左であるとも言えるだろう。

4節 Dの「生命・自然・崇高なものとのかわり」について

—「大なる宇宙の力」とどう向き合うか—

最後に、内容項目Dの「主として生命や自然、崇高なものとのかわり」で重要になるのは、人知を超えた尊い存在といかに向き合うかである。廣池も崇高なものには多大な関心を払っている(9巻3201頁)。Dの内容項目の中でも「よりよく生きる喜び」などは、根本的な道徳的原理であるため、究極的には「人心の開發」にもなる。そのため、この「よりよく生きる喜び」こそ最終的にはAの「主として自分自身の生き方に関すること」とも還流し、究極的な「自己実現」から「自己創造」へ至る道にも通ずる。

(1) 自然からの恩恵に感謝する心を育てる

そもそも生命というものは、自然の力によって生み出され、自然の法則に従いながら、自然の恩恵によって生かされている。廣池も、すべての物事は、自分一人の力で成し遂げているのではなく、「自然の恩恵」を受け、多くの人々に支えられながら生きているということを深く自覚する必要があると言う(廣池、2014年、106-107頁)。

また、人生で起こる困難な諸問題は、個々人が自己中心的な発想に陥りがちな態度から生じていることが多い。しかし、あらゆる存在がこうした自然から多大な恩恵を受けて生きていることに意識を向けると、多くのことに感謝できるようになり、自己中心的な精神的態度も変わってくる。

(2) 崇高なものへの感謝・報恩

人間は自然に連なる「大なる宇宙の力」「自然の力」に生かされている。そうした意識をもつようになると、家・国家・人類の恩人への感謝にも繋がっていく。ここでは国や人類を超えて、自分を生かし支えてくれる存在に感謝し、報恩することが大事である(廣池、2014年、80頁)。

基本は、Aの項目でも指摘されているように、自我や利己心を捨て、自分たちの家族や国家だけよければよいという狭小な発想から脱却して、より広大な「宇宙の力」「神様の心」に繋がりに行動することである。そうすることで、結果的に「天からの報酬」が与えられることになる(廣池、2014年、56頁)。

こうした広遠な見地から、廣池は「天命」を最大限に尊重するわけだが、ただ「天命を待つ」だけでよいと考えているわけではない。「与えられた場や機会を自分の天命と受けとめた上で、それを最大の目標に据えて、あらゆる手立てを尽して実現を目指す」ことが大事であるとする。

つまり、廣池によれば、「人事を尽くして天命を待つ」のではなく、「天命に従って全力を尽くす」ことが大事なのである(9巻3323頁)。天命とは「天から与えられた使命」であるため、決して偉ぶることなく、「利己心にとらわれず、無心の状態で、その使命の実現のために全力を注ぐことになる。

こうした文脈で天や神、仏などの宗教的な用語を出すと、公教育における道徳教育では忌避されることもある。もともと廣池の根本思想には、当然のように神や仏への信仰があったと言える。しかし、それは特定の宗教・宗派への帰依ではなく、神や仏への直接的な帰依である。廣池は道徳と同様に宗教をも機能論的に捉え直し、その本質を科学的に究明しようとしていったのである。

(3) 天命に従うことを通した究極の品性向上

人間が自らの天命を悟り、それに従った道徳的な生き方が、結局のところ、究極の意味で自らの品性向上になり、真の幸福にも通じるのである。廣池によれば、天命に従って道徳的な生き方を貫き、一つ一つのこと全力で当たれば、それに応じて品性が向上していき、その結果として人生の目標を成就し、幸福がもたらされることにもなる(9巻3323頁)。

それは廣池が好んで用いた孟子の言葉にあるように、「天爵を修めて、人爵これに従う」ということになる。世俗的な出世や私的な幸福を求めて、打算的に道徳的に振る舞えば、一時的な成功や人爵を得ることができるかもしれないが、普遍的な成功ではない。決して見返りを求めることなく、自己犠牲の精神で誠を貫き、純粋に善い心づかいと行いをすることで天爵を収めることができると、その結果として人格が高まっていき、周囲からも敬われ、天からも敬われ、人爵も得られるようになる。このように天爵を修めた結果とし

て、(人爵となる)社会的な出世や幸福ももたらされることになることを理解することが大事になる。

おわりに

本稿では、道徳科の理論的基盤を形成するために、廣池千九郎の『道徳科学の論文』に基づいて道徳科の内容項目ごとに指導法の在り方について検討してきた。一般常識レベルの道徳的諸価値をただ理解するのではなく、道徳的問題を解決するための原理原則や判断基準を習得し、道徳的判断力や心情、実践意欲、態度までを育成していく必要がある。特に、多様な価値観がうずまき、道徳的諸価値が対立したような問題に際して、どのように学習指導すればよいかを事前にシミュレートしておきたい。特に、小・中学校の学習指導要領にある内容項目に応じた問題を設定し、子どもたちが道徳的問題の解決を通して、生きて働く道徳性を育成できるように構想したい。道徳科における内容項目のA、B、C、Dではそれぞれ対象とする分野・領域が異なるため、問題解決のための原理原則や判断基準や手法もいくらか異なってくる。それを弁えて、道徳授業の議論をどこにどう導いていくかがポイントになる。

今後の課題としては、第一に、内容項目のBやCの道徳的問題を取り扱う場合に、「正義と思いやり」など道徳的価値の対立が生じた場合、いかにしてバランスよく誰もが納得できる解を導き出せるかである。道徳科の検定教科書では、道徳的問題を提示して、具体的な解決策を提示することは少ないが、道徳科学の発想でどのように解決できるか具体的に示していく必要がある。第二の課題としては、Dの「崇高なもの」などは宗教的価値とも関連するため、道徳的問題の設定自体が難しい点にある。こうした道徳的価値に関わる発達心理学や哲学的解釈も検討しておく必要がある。以上の諸点は、今後の課題として継続して検討していきたい。

(註)

- (1) 本稿は次の拙稿を発展させたものである。柳沼良太「道徳教育の学問的基盤を再構築するための研究—廣池千九郎の『道徳科学の論文』と関連づけて—」、『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』第70巻第1号、2021年、231-240頁。
- (2) 廣池千九郎『道徳科学の論文』、道徳科学研究所、1928(昭和3)年。本稿での引用・参照箇所は通しの頁数でその都度、括弧内に示してある。
- (3) アンジェラ・ダックワース著、神崎朗子訳『GRIT やり抜く力』、ダイヤモンド社、2016年。
- (4) 中田『思い出の旅』、廣池学園出版部、1960年。大野正英「『三方よし』の由来とその現代的意味」、『日本経営倫理学会誌』第19号、2012年、246頁。
- (5) 廣池千九郎著・廣池幹堂編『「三方よし」の経営学—廣池千九郎の教え99選—』、PHP研究所、2017年。モラロジー研究所『徳づくりの経営』、平成25年。
- (6) 究極の「自己実現」から「自己超越」へ至る道については、A・マズローの『人間性の心理学』（産業大学出版部、1987年）等も参照のこと。

(参考文献)

- 廣池千九郎著・廣池幹堂編『「三方よし」の人間学—廣池千九郎の教え105選—』、PHP研究所、2014年。
廣池千九郎著・廣池幹堂編『「三方よし」の経営学—廣池千九郎の教え99選—』、PHP研究所、2017年。
モラロジー研究所『道徳実行の指針』、平成20年。
モラロジー研究所『徳づくりの経営』、平成25年。
モラロジー研究所『モラロジー概説』、1982(昭和57)年。
The Institute of Moralogy, *An Outline of Moralogy, A New Approach to Moral Science*, 1987.
モラロジー研究所『テキスト モラロジー概論』、平成21年初版、平成27年改訂版。
柳沼良太『プラグマティズム、公共、道徳—教育の新しい可能性を求めて—』、あいり出版、2019年。

麗澤大学道德科学教育センター『新編 大学生のための道德教科書』、麗澤大学出版会、平成30年。
岩佐信道・北川治男（監修）『廣池千九郎の思想と業績—モラロジーへの世界の評価—』、モラロジー研究所、2011(平成23)年。